

【講評文】 8月9日（火） 4校目

「幕を下ろす」 池田高校

「幕を下ろす」という題名は、主として「劇の終わり」という意味と「3年生の引退」という2つの意味として捉えることができ、幕を下ろす決意をするまでのリアルタイムの60分間を見ることができる劇でした。舞台の中だけでなくアクティングエリアを広くとることで、観劇者にホール全体を舞台として見せることに成功していました。劇を作っていくのは舞台にいる人だけではないことも表現していて、主に舞台上の人と装置、音響と照明で表現する今までの基本を覆す展開でした。

キャストは、声がよく通り、誰が聞いてもセリフを理解することができました。踊る場面では、全員の動きが揃い安定していましたし、笑いが起こるシーンでも、1回目以前の笑いの余韻があり聞き取れなくても、2回目があったことで理解できるなど、台本上の構成もよく、シーンが潰れずに観劇者の集中も続いたように思いました。

照明では、独白のシーンのスポットが一人を照らしているわけではなく、淡く周りも照らすことで、スポットと周りの区別が曖昧になり、周りとも常に繋がっていることを視覚的に感じることができました。

衣装では、一年生はまだ部活Tシャツが届いていなくて体操服、二年生は部活Tシャツ、三年生は制服と、一目でわかるようにきちんと類別化されていて、自分たちもそうだったな、とリアルな部活風景を思い出しました。

装置では、椅子にキャストがついているものかついていないものがあり、舞台上での用途の差を感じにくいところがありましたが、閉ざされた小部屋を想像させる配置で、今までの劇で使ってきた装置が置かれている「部室」というイメージが凄く浮かびました。

全体を通して、観劇者を舞台と同じ空間にいざなう劇でした。タイトルが「幕が下りる」という自動詞ではなく「下ろす」という他動詞になっていることで、意志をもって自分たちの幕を下ろした三年生を描きつつ、完成した台本ではなく今までの演劇で使われてきた台本がたくさんあった事で、三年生が引退しても歴代の台本は残っていくように、全てがなくなってしまうわけではないことも示しています。台本が届かず完成してないということが、演劇に完成はなく、まだまだ続いていくと捉えることもできる非常に深い内容に感じられました。

池田高校のみなさん、上演お疲れさまでした。

(文責 鶯谷高校 二年杏 一年メガ)